

## 音声ガイドンス(2階 Aゾーン)

※番号欄 数字は展示室における掲示番号、( )はプロット図のポイント記号を示す。

番号	項目	ガイドンス内容等
1 (M)	ようこそ ピースおおさ かへ	ピースおおさかは、戦争の悲惨さと平和の尊さを伝えていくことを目的に、大阪府・大阪市の支援のもと、公益財団法人大阪国際平和センターにより運営されています。1991年、大阪城公園南側に開館し、戦後70年となる2015年、大阪空襲を語り継ぐ平和ミュージアムとして装いを新たにスタートしました。第二次世界大戦・太平洋戦争に至る経緯をたどりながら、大阪空襲の実情とともに、戦時下の大阪の人々の暮らし、戦後復興期の人々のくらしと大阪の歩み、平和に関わる内外の動きを展示しています。エントランスから続く2階展示室から1階展示室、そして3階展示室へと、ごゆっくりご覧ください。
2 (A1)	Aゾーン： 昭和20年、大 阪は焼き尽く された	太平洋戦争末期の1945年、アメリカ軍の無差別爆撃で日本の主要都市のほとんどが焼け野原となりました。ここ大阪も50回を超える空襲に見舞われ、1万人を超える人々が亡くなりました。このゾーンでは、日本の商工業の中心として隆盛を極め、「東洋のマンチェスター」「大大阪」などと呼ばれた街が焼き尽くされた姿をご覧ください。現在の様子も併せて展示していますので、見比べてみてください。
3 (A2)	被弾した水筒	この水筒は、6月15日の第4次の大空襲のときに被弾したもので、持ち主は避難した壕の中で被弾したことに気付きました。当時妊娠していましたが、この水筒のおかげでお腹の子は助かり2か月後、無事に出産しました。ご家族が、空襲の記憶、母の記憶として2006年、当館に寄贈されました。
4 (A3)	10m被災写真	3月13日深夜から翌14日未明にかけて、大阪はマリアナ基地を発進した、戦略爆撃機B29 274機による大空襲を受けました。1733トンもの焼夷弾が投下され、北区方面を除く市内中心部約21平方キロが焦土と化しました。この写真は、その直後、大阪を代表する繁華街のミナミの様子を写したものです。右後方には大阪城天守閣が遠く見えますが、現在の街並みからは想像もつきません。B29 100機以上による大空襲は、この日を最初に終戦の前日、8月14日まで、8回に及びました。
5 (A4)	当館からの メッセージ	これは、ご来館いただいた皆様への、当館からのメッセージです。 あの日 あの時—大阪空襲— 21世紀に輝く大阪。たくさんの人びとが行き交い、笑顔があふれています。でも・・・知っていますか。先の大戦末期1945年、大阪の街は、見渡す限り焼け野原になりました。激しい空襲に遭い、家族や友達の尊い命が一瞬にして奪われたのです。 なぜ大阪が、日本が・・・と問いかけ、あの悲劇を二度と繰り返さないという決意をこめて、私たちは、未来を担う子どもたちに語り継いでいきます。あの日、あの時のことを・・・。いつまでもこの平和な街、大阪を残すために、そして、それが世界の平和につながることを願いつつ・・・。

## 音声ガイドンス(2階 Bゾーン)

※番号欄 数字は展示室における掲示番号、 ( )はプロット図のポイント記号を示す。

番号	項目	ガイドンス内容等
6 (B1)	Bゾーン： 世界中が戦争 をしていた時 代	このゾーンでは、大阪空襲が起こった背景として、日本はなぜアメリカと戦争をしたのか、その経緯を知るため、日清戦争から太平洋戦争までを、当時の国際情勢を踏まえながらたどっていきます。 また、明治、大正、昭和へと時代が移るにつれ、戦争のようすや用いられる兵器が著しく発達し、甚大な人的・物的被害が生じるようになったこともご覧いただけます。 (※映像 一般向け13分30秒 ・ 子ども向け9分20秒)
7 (B2)	年表の概要	ここでは、先ほどの映像「日清・日露戦争から太平洋戦争まで」の内容を図版化したもので、大阪での出来事を併せて紹介しています。 上から、欧米、アジア、日本、大阪の出来事を年代順に対応させています。中ほどの地図や関係図は、日本にとって転機となった戦争・紛争やその当時の国際情勢について概観するものです。
8 (B3)	兵器関係図の 補助解説	20世紀、人類はそれまで経験したことのない世界規模の戦争を2度も経験しました。それは、長期間にわたり、国力のすべてを注ぎ込み、兵士だけではなく民間人も戦争に協力する「総力戦」と呼ばれるものでした。また、飛行機、戦車、潜水艦、毒ガスなどの近代的な新兵器が次々に開発され、大量に投入されたことにより、被害が甚大なものとなりました。 日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦と、4つの戦争を取り上げ比較していますが、時代が進むほど、死者の数が驚くほど膨大なものになっています。第二次世界大戦に至っては、直接の戦場ではない、「銃後」の民間人の死者数が軍人の倍ほどにもなっています。

## 音声ガイド（2階 Cゾーン）

※番号欄 数字は展示室における掲示番号、（ ）はプロット図のポイント記号を示す。

番号	項目	ガイド内容等
9 (C1)	コネクティング展示: 「大大阪と「軍都」大阪」解説	ここでは、大正期から昭和初期にかけて大大阪と呼ばれていた大阪の姿とともに、陸軍直轄の兵器製造工場として、東洋一の規模を有していた大阪砲兵工廠の変遷を紹介します。日本やアジアの要所に位置する大阪市は、その経済力を背景に各地から人々を集め、1925年には、国内第一位、世界第六位の人口211万人を抱える大都市となります。 一方、大阪砲兵工廠は、1870年に開設され、その後、戦争の度に拡大し、1937年日中戦争の開始直後には最盛期を迎えます。このイラストは、当時の大阪砲兵工廠を描いたもので、中央奥には大阪城天守閣が見えます。
10 (C2)	Cゾーン: 「戦時下の大阪の暮らし」	このゾーンでは、戦時下の大阪の人々の暮らしをテーマに展示しています。活気にあふれていた大阪にも、戦争への動きが強まっていきます。戦争の長期化は、国民生活に大きな影響を及ぼしました。物資が不足するなど、人々は苦しい生活を余儀なくされました。一方、戦局が悪化し、日本の各都市では、来るべき空襲への備えが、地域や家庭でも進められていきます。戦火の脅威にさらされながらも、懸命に生きた人々の姿をご覧ください。 このスロープの壁面の展示から、繁栄の時代から戦争の時代へと移っていく中で、戦争の影がくらしにも忍び寄るようすがうかがえます。
11 (C3)	ここに並んで たってみよう	この壁面に描かれているのは、戦後間もない1948年の大阪府の小学6年生の男子と女子それぞれの平均身長と平均体重です。戦時中の食料事情が悪かったことから、子どもたちの身長は低く、体重は軽くなっていました。 みなさん、ここに並んで立って比べてみてください。 (※ 男子 128.6cm 27.5kg ・ 女子 129.1cm 27.2kg)
12 (C4)	子どもたちの戦時下の暮らし	ここでは、子どもたちが、戦時下をどのように生きたのかを紹介しています。「尋常小学校から国民学校へ」、「ひもじさと闘った学童集団疎開」、「われら少国民」、「戦時教育令の公布」「戦争の犠牲となった動物たち」の、大きく5つのテーマを設けています。 ここに置かれている机は、当時の国民学校の教室にあった机をイメージして作っています。各机には、テーマごとに資料が展示されています。また、パネルの画面をタッチしていただくと、テーマごとに、当時の子どもたちの暮らしに関わる情報を見つけることができます。 さあ、パネルにタッチして、当時の子どもの暮らしを探索してみてください。 (※検索システム 国民学校10 ・ 学童疎開10 ・ 遊び4 ・ 暮らし11 計35項目)
13 (C5)	大阪から日本初の国防婦人会 発足	ここでは国防婦人会の活動を取り上げています。国防婦人会は、1932年に大阪市港区周辺に住む主婦たちが、大阪港から出征する兵士に湯茶をふるまったことから始まりました。その後、全国に広がり、大日本国防婦人会と名称を変えます。防空演習への参加や、廃品回収や節約運動などを行い、銃後を支えました。 割烹着と白だすきが、この会員の服装とされたことから、女性が活動しやすくなったと言われています。
14 (C6)	「一億総動員で必勝」から「統制下の暮らし」へ	日中戦争、そして太平洋戦争と戦線が拡大して行く中で、国内では、戦争遂行を最優先として、1938年に、国家総動員法、1939年には、国民徴用令が制定され、国民は厳しく統制されることとなります。 さらに政府は、1940年に、隣組を制度化し、日常生活の隅々まで国民を指導しました。 様々な資源や物資を戦争に回さなければならず、生活物資が不足しはじめると、米をはじめとする主要な食料や多くの生活必需品は配給制度の対象となりました。衣服も統制して「国民服」を制定しました。展示ケースには、配給制度に関する回覧板などを展示しています。 また右側には、国民服を着た男女のマネキンを展示しています。当時の統制下での暮らしの一端がうかがえます。

## 音声ガイド(2階 Cゾーン)

※番号欄 数字は展示室における掲示番号、( )はプロット図のポイント記号を示す。

番号	項目	ガイド内容等
15 (C7)	女学生の日記	戦局が徐々に悪化する中で、女性も戦力の一員として一層期待されていきます。これは、高等女学校2年生の女学生が書いた日記です。1943年1月1日から始まっています。この日には、「大東亜戦争2回目の歴史的元旦は来た。今年もきつときつと心を引きしめて勝ち抜くぞと決意を新たにすると書かれています。 また同年11月29日には、「兄、出発する。私も、しっかりして兄に恥じない行いをしようと思う」とあり、兄が出征したときのことが書かれています。 これらの日記に記された一つ一つの言葉から、当時の女学生の気持ちが感じ取れるのではないのでしょうか。
16 (C8)	家族との別れ、戦地へ	戦争が拡大し長期化していく中で、兵士の動員が大規模となっていきます。動員される兵士は、家族と別れて戦地にいかねばなりません。そして戦況が悪化していく中で、無事の帰還も難しくなっていきます。 ここでは、出征する兵士が家族あてに送った手紙や、戦地から家族に送った手紙、兵士の戦死を知らせる手紙を紹介しています。 こうした手紙の文面から、当時の人々の思いが伝わってきます。
17 (C9)	軍隊手牒	兵士には、軍から「軍隊手牒」が支給されました。その中には、軍人としての基本的な心得以外に、所持している兵士の活動が記載されていました。展示ケースをご覧ください。3人の兵士の軍隊手牒があります。それぞれ、どの戦地に赴いたのかが、わかります。大阪から出発し、中国、そして南方へと、それぞれ異なった経路で戦地にいきます。ひとりひとりの兵士にそれぞれの戦争があったのです。 そして、1冊の軍隊手牒が、一人の兵士の戦地で生きた証を物語っています。
18 (C10)	戦時下の民家	これは戦時下の民家を再現したものです。迫りつつある空襲に備え、生活していた様子を展示しています。 各家庭では、防火水槽、火たたき、バケツ、防空頭巾などが備えられ、窓などのガラスには爆風による破片の飛散を防ぐために紙テープが貼られ、床下などには、防空壕が作られていました。 夜は電灯の明かりが窓から外にもれないよう電灯の笠に黒い布がかぶせられました。 (※家族の会話 1分10秒)
19 (C11)	証言と体験画(スロープ)の解説	1階展示室につながるこのスロープの壁に展示しているのは、大阪空襲を体験された方による証言と絵画です。当時の光景を思い起こして、体験者が語る言葉、そして体験者が描く絵。炎が画面いっぱい描かれているもの、防火用水池で見た無数の遺体、模擬原爆投下による巨大な穴やバラバラに壊れた民家など。その一つ一つの言葉、一枚一枚の絵から、空襲の激しさとその惨状が伝わってきます。 ピースおおさかでは、団体向けに、体験画展示用パネルの貸出を行っています。詳しくは事務所までお問い合わせください。 (※証言6人・絵画14枚)

## 音声ガイド（1階 Dゾーン）

※番号欄 数字は展示室における掲示番号、（ ）はプロット図のポイント記号を示す。

番号	項目	ガイド内容等
20 (D1)	Dゾーン「多くの犠牲を出し、焼け野原になったおおさか」解説	大阪の街は、太平洋戦争末期、50回を超える空襲により、壊滅的な被害を受けました。大阪の街を焼き尽くし、多くの犠牲者を出した大阪空襲とは、どのようなものだったのでしょうか。 空襲の悲惨さを理解するには、空襲を受けた人たちの目線に立って、その実態を見ることが大切です。 このゾーンでは、当時撮影された写真をはじめ、実物資料や体験者の証言などを中心に、空襲により被害を受けた大阪の街や人々の様子を紹介しています。
21 (D2)	大阪大空襲と被災写真	空襲の悲惨さを理解するには、空襲を受けた人たちの目線に立って、その実態を見ることが大切です。
22 (D3)	証言の部屋	このゾーンでは、当時撮影された写真をはじめ、実物資料や体験者の証言などを中心に、空襲により被害を受けた大阪の街や人々の様子を紹介しています。
23 (D4)	攻撃の恐ろしさを物語る品々 (被弾した国民服、ミシン)	空襲では多くの方が被害を受け、犠牲となりました。 この銃弾で引き裂かれた国民服は、大阪市内で旅館業を営んでいた方のもので、6月1日、第二次大空襲の際、戦闘機P51ムスタングの機銃掃射を受けて亡くなったときの物です。その方の息子さんは、遺体にかけてあったムシロからわずかに出ている頭髪と足を見ただけで、父であることがわかったそうです。 左側にあるのはミシンの頭部です。空襲により住んでいた家は全焼してしまいましたが、避難するときに、これだけを水槽に沈めておいていたために、残ったものです。これらの品々は、物言わぬ語り部として、戦争の記憶を伝えています。
24 (D5)	戎橋界隈の焼け跡ジオラマとマッピング映像	この目の前にある大きなジオラマは、3月13日の第一次大空襲後の大阪ミナミの戎橋界隈の焼け跡の様子を再現したものです。 上部にある道路は、大阪の都心を南北に走る御堂筋です。右側は、東西に流れる道頓堀川です。いくつかの建物が残っていますが、焼け野原の状態になっています。 このジオラマをスクリーンにしてマッピング映像が映し出されます。最初の映像は、空襲前の1942年、同じ場所を上空から見た姿です。どうぞご覧ください。 (※マッピング映像 6分10秒 20分間隔で放映)
25 (D6)	防空壕解説	ここでは、防空壕の種類やつくり方など防空壕に関する情報とともに、防空壕を体験された方の証言や絵画を紹介しています。 防空壕は、空襲から身を守るためのものとされていましたが、実際に作られた多くは、資材不足もあって、空襲に耐えられるものではありませんでした。防空壕自体が焼夷弾や爆弾によって破壊されたり、その中で蒸し焼きになって亡くなった人も少なくありませんでした。 防空壕の中で過ごす不安はどのようなものだったのか体験してみましょう。 (※体験時間 1分30秒)
26 (D7)	米軍の戦略と大阪空襲 (焼夷弾・1トン爆弾・模擬原爆)	ここでは、「米軍の戦略と大阪空襲」というテーマで、米軍はなぜ人口の密集した大阪を何度も繰り返し空襲したのか、米軍の戦略の特徴について展示しています。 正面に展示しているのは、焼夷弾のレプリカです。地面に突き刺さった細い筒のようなものがM69焼夷弾で、木造家屋の多い日本を攻撃するために開発されたものです。右側にある大きな二つの爆弾は1トン爆弾で、大阪砲兵工廠などの大規模な軍需工場や強固な施設の破壊をねらって投下されました。 また、このコーナーでは、広島、長崎への原爆投下を成功させるための訓練として、模擬原爆が日本の各都市に投下され、大阪にも落とされたことを紹介していますので、あわせてご覧ください。

## 音声ガイド(3階 Eゾーン)

※番号欄 数字は展示室における掲示番号、( )はプロット図のポイント記号を示す。

番号	項目	ガイド内容等
27 (E1)	Eゾーン： 「たくましく 生きる大阪」	ここは戦後の占領下のくらしから高度経済成長を経て、再び大都市へと復興をとげた大阪の様子を展示しています。焼け野原のまま終戦を迎えた大阪は、貧困や物資不足などの苦しみに耐えるくらしで始まりました。また、終戦からひと月余りで和歌山県に上陸したアメリカをはじめとする連合軍の占領下におかれました。都市部では、衣食住のすべてが不足する中、駅前などに闇市が現われ、多くの人々がここで物資を手に入れました。戦争によって傷ついた人々の生活は次第に再建されていきます。1952年に占領統治が解除されたのち、高度経済成長に入った大阪では、さまざまな産業も発展していきます。復興が加速する大阪は大きく変わっていきました。
28 (E2)	終戦後の証言 ※壁面の証言 解説	壁面では7人の体験談を紹介します。モニターの映像は、2014年にピースおおさかで証言をいただいた4人の方です。 奥村誠一さんは終戦時12歳でした。学童疎開の体験や疎開先から大阪に帰ってこられた記憶をお話し頂きました。 高田康子さんは終戦時13歳でした。物がなくくらしの中で闇市へ行かれた体験をお話し頂きました。 秋山美代子さんは終戦時12歳でした。苦しい生活の中で家族と過ごした日々をお話し頂きました。 川人義明さんは終戦時17歳でした。志願兵で海軍に入り、目と胸を負傷し、両目を失明されました。戦後、傷痍軍人としてのお話しを頂きました。 壁面にはその他3人の体験談がありますのでご覧ください。 (※証言映像放映 4人 ・ 4分30秒)
29 (E3)	占領下のくらし 「敗戦と大阪」「大阪と進駐軍」 ※実物展示 「オキュパイド ジャパン製 食器」	1945年9月、和歌山県に上陸したアメリカをはじめとする連合軍は大阪に入り、大阪府下には翌年4月時点で1万4千人もの進駐軍が配置されました。連合軍によって、市内の主要な建物は接收され、人々のくらしや出版・放送などの言論活動も制約されました。 ここにある食器は占領下の日本から、海外への輸出のために生産されたものです。裏側には「メイドイン オキュパイド ジャパン」と見慣れない表示があります。民間貿易の再開された1947年夏からサンフランシスコ平和条約の発効した1952年の5年間は、占領下の日本製であるという意味で、「メイドイン オキュパイド ジャパン」と表示することがGHQより命じられていました。
30 (E4)	苦しかったくらし 「住宅難と食糧難」「配給制度と闇市」 ※買い出し リュックレブリカ	戦災で住居を失った人々は、防空壕や橋の下などで生活しなければなりませんでした。この他、応急的なバラック住宅を建てて生活しました。また1945年の秋は不作の影響もあり、配給物資も不足していました。 そこで焼け跡となった駅前などで、食べ物や日用品の販売が始まりました。違法なルートや価格で取引され、次第に集団化して闇市と呼ばれました。人々は物が足りなくくらしを生きるために、闇市での買い物や、農村部への買い出しに行きました。買い出しでは農作物の入ったリュックを何時間も背負い、満員列車に乗って持ち帰りました。ここではそのリュックの重さを再現しました。体験者によると体の前後で約19キロも背負っていたそうです。さあリュックを持ち上げてみましょう。

## 音声ガイダンス(3階 Eゾーン)

※番号欄 数字は展示室における掲示番号、 ( )はプロット図のポイント記号を示す。

番号	項目	ガイダンス内容等
31 (E5)	子どもたちの くらし 「戦後の学校 教育と子ども たちのくらし」 ※学校給食レ プリカ、墨塗 り教科書レプ リカ、紙芝 居・めんこ	戦後まもなく、焼け跡のガレキを片付け、授業が再開されました。まずは屋外での青空教室、そして焼け残った校舎や体育館も間仕切りをして教室として使われました。その後、食糧援助を受けて給食も始まり、教育基本法制定によって学校制度が大きく変わっていきました。 当時の献立を再現した給食です。コッペパンに野菜の汁物と脱脂粉乳です。子どもたちの栄養バランスが考えられていました。 横には墨塗りの教科書があります。GHQの占領下では軍事色の強い教育が禁止され、教科書に墨を塗ったりページを破ったりした教科書で勉強しました。その横には紙芝居とめんこがあります。既製のおもちゃは少なかったので、子どもたちは空き地などで工夫しながら遊びました。
32 (E6)	発展する大阪 「発展する大 阪と人々のく らし」 ※当時のテレ ビ	1952年にはGHQの占領統治が解除され、大阪の街も目覚ましい発展を遂げていきます。 高度経済成長期の大阪は主要道路の整備、ビルや駅前の開発、湾岸地域の整備や地下鉄の延伸工事などが行われました。 生活スタイルも急速に変化していきます。水洗トイレに洗面所、ダイニングキッチンにベランダが付いたニュータウンが建設され、各家庭には電化製品も普及していきました。 1952年に国産テレビ第1号が完成するとテレビの量産販売が始まりました。ここにあるテレビ画面では、電化製品が普及しはじめた1955年から1970年、世界中から約6500万人の人々を集めた大阪万国博覧会までの高度経済成長期の姿を写真でご紹介します。
33 (E7)	1960(昭和 35)年の物価 「データに見 る大阪のくらし」 ※壁面物価の 説明	現在も東大阪市にある商店街の1960年の物価を紹介しています。高度経済成長期に入り、商店街は舗道やアーケードも整備され、多くの人で賑わっていました。ここでは当時のくらしを支えた日用品や食べ物の価格を表示しています。 大阪といえばたこ焼き。これは当時、12個入りで30円。お好み焼きは1枚80円でした。中華そばは1杯55円、サイダーは1本35円でした。食べ物の価格を見ると、大変安く感じられますが、当時の収入は、現在のおよそ十五分の一に過ぎません。 品物によっても物価の変動幅は異なります。大量生産が難しかった衣服などは、今よりも高価な物でした。さて現在の物価に換算すると、どれくらいの価格になるか考えてみましょう。

## 音声ガイド（3階 Fゾーン）

※番号欄 数字は展示室における掲示番号、（ ）はプロット図のポイント記号を示す。

番号	項目	ガイド内容等
34 (F1)	Fゾーン： 「私たちの未来をつくっていくために」解説	このゾーンは、4つのコーナーで構成されています。今も、世界各地で戦争や紛争が絶えない現実に向け、その背景やそれらがもたらす問題について考え、戦後の日本が国際協力によって信頼を得てきた歩みや、世界で活動する大阪の若者の姿などを紹介しています。私たち一人ひとりが今できることは何か、平和について想像力を広げ、考え、学び、行動することへのヒントにさせていただきます。
35 (F2)	日本の国際社会への復帰	ここでは、戦後の日本が第二次世界大戦の悲惨な経験から学び、軍事力に頼るのではなく、国際協力によって信頼される国際関係を築いてきた歩みを紹介します。先の大戦をふり返ること、それは平和への第一歩です。戦後、日本は先の大戦の教訓をふまえ、平和主義を掲げた日本国憲法の制定から、平和への道を歩み始めました。国際連合への加入による国際社会への復帰や近隣諸国との新たな関係の構築、国際交流や国際貢献の広がりなど、日本の平和への歩みをたどってみましょう。
36 (F3)	今、この瞬間にも平和は脅かされている	ここでは、第二次世界大戦終結後も、世界各地でさまざまな戦争や紛争が起きている現実に向け、その背景やそれらがもたらす問題について紹介しています。民族や宗教の違い、貧困など戦争を引き起こす要因とともに、難民や飢餓、地雷、少年兵の問題など戦争がもたらす深刻な現実に向けます。隣のパネルにある世界地図をご覧ください。第二次世界大戦後に起きた戦争や紛争を示しています。第二次世界大戦のような大きな戦争ではないものの、内戦や周辺国を巻き込んだ紛争が、いまもどこかで起きているのです。
37 (F4)	大阪の復興からみた平和の発信	ここでは、大阪が戦前・戦中・戦後を通じて得た教訓をもとに果たすべき役割とは何だろうか、私たち一人ひとりが、今できることは何かを考えていきます。その手がかりとして、国際連合をはじめとする国際機関の活動やNGOと呼ばれる民間団体などによる人道支援や平和貢献活動などとともに、世界で活動する大阪の若者の姿を紹介しています。
38 (F5)	平和について～私たちにできることはなんだろう	ここでは、平和について想像力を広げ、考え、学び、行動することの大切さを考えていくために、世界各地の紛争地域で生きる子どもたちの姿を紹介するとともに、世界の平和のために私たちにできることはなんだろう、何が必要なのかと問いかけます。例えば、1000円の寄付で「はしかを予防するワクチンを30回分贈ること」ができます。寄付の他にも、買い物の際にマイバッグを持参する、ペットボトルのキャップを回収する、ボランティアに参加するなど、平和のために身近なところではいろいろなあります。あなたにもできることから始めてみましょう。
39 (F6)	平和のために～戦争の記憶を語り継ぐ（大阪の戦跡紹介）～エピローグ	戦前の大阪には軍事施設が数多くあり、また、大阪は50数回におよぶ空襲を受けました。そのため、軍事施設跡や空襲で被害のあった傷跡をとどめている場所が、今も府内に多く残っています。戦争の記憶を風化させることなく、後世に語り継いでいくため、それらの施設や場所を訪ねて、平和への思いを新たにしてみませんか。出口手前のコーナーでは、エピローグとして、ピースおおさか開館10周年を記念にして作られた「Every day, Happy day」という歌の歌詞を紹介しています。この詞には、「平和」があふれています。あなたにとって「平和」とは何か考えてみましょう。



## 音声ガイダンス(3階 Fゾーン)

※番号欄 数字は展示室における掲示番号、( )はプロット図のポイント記号を示す。

番号	項目	ガイダンス内容等
40 (T)	大阪空襲死没者名簿／刻の庭	<p>この中庭には、「刻(とき)の庭」があります。この施設は大阪空襲で亡くなられた方々を追悼し、恒久平和を祈念する場として、府民・市民の皆さんをはじめ、ご遺族や団体など多くの方々からのご寄付により、戦後60年にあたる2005年8月に完成しました。</p> <p>犠牲となられたお一人おひとりのお名前が「とき」の証人としてモニュメントに刻まれています。平和を願う心が「刻(とき)」を越えて生き続けるようにとの思いを込めて、「刻(とき)の庭」と名づけられました。</p> <p>なお、モニュメントに刻まれているお名前は、大阪府の委託も受け当財団が2002年から2004年にかけて行った調査とその後判明したものであり、財団では、大阪空襲に関する資料や情報のご提供を引き続きお受けしています。</p>